

第28回北海道大学-ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催

本学の戦略的国際連携先である韓国ソウル大学校（以下「SNU」という。）との第28回ジョイントシンポジウムが、11月5日（水）・6日（木）の2日間、札幌キャンパスで開催されました。SNUと北海道大学によるジョイントシンポジウムは、初回開催の1998年以来、毎年札幌とソウルで交互に開催しており、今年で28回目を迎えました。

今般のシンポジウムは「学術イノベーションと社会への参画－社会及び産業との連携による研究・教育の推進－」をテーマとし、同シンポジウムに付随して開催された研究分科会の研究分野は、「法学」「農学」「工学」「医学」「獣医学」「情報科学」「環境健康科学」「教育学」「スラブ・ユーラシア研究」と多岐にわたり、学術イノベーションと社会への参画に向け

た研究の推進に関する可能性が示唆されたものとなりました。

シンポジウムの全体会では、テーマ「学術イノベーションと社会への参画」に沿う形で、北大グリーントランスフォーメーション（GX）先導研究センター副センター長の村越 敬教授が基調講演を行い、昨年創設された同センターの紹介のほか、今後、GX研究の卓越性を高め、社会実装に向けた取組を加速していく旨発表を行う一方、GX研究の研究事例として、同センターに所属する伊藤貴則助教が、土壌への炭素貯留効果のあるバイオ炭の活用が気候変動の緩和に資するとし、その有用性に関する発表を行いました。

同シンポジウムの開催中、両校執行部が会合を開催し、SNUで来年開催予定の第29回ジョイントシンポジウムに

関する調整が行われたほか、SNUの執行部職員が北海道ワイン教育研究センター及び総合博物館を視察しました。

同シンポジウムの翌々週には、両校の事務職員を相互派遣する職員交流も実施され、本学の社会共創部広報課職員1名をSNUへ派遣する一方、SNUの企画調整部職員2名を本学に受け入れ、互いの職場への訪問を通じて、広報・コミュニケーション業務に関して苦労している点や工夫している点について意見交換を行い、相互に交流を深めました。

29回目のジョイントシンポジウムは、2026年9月から11月にかけてソウルで開催予定です。

（国際連携推進本部）



開会の挨拶を述べる北大 高橋 彩理事・副学長（国際担当）



祝辞を述べるSNU キム・テギョン国際担当副学長



シンポジウム全体会への参加関係者

分科会1

Work and Law in the age of AI and Digitalization - comparative research of Japan and Korea

AIとデジタル時代の労働と法－日韓両国における社会の変化と規制の対応／法学研究科 教授 池田 悠

本分科会では、「AIとデジタル時代の労働と法－日韓両国における社会の変化と規制の対応」を統一テーマとして、AIやデジタル化の進展によって変容を迫られている日韓両国の伝統的な労働法制に着目し、ソウル大学校法科大学院の崔 碩桓副教授とともに、北海道大学・ソウル大学校双方の大学院生による個別報告7編を交えつつ、4時間に及ぶ英語での分科会を開催しました。

まず、開催校である北海道大学を代表して法学研究科の池田 悠教授から開会の挨拶を行い、本分科会の趣旨と当日のタイムスケジュールを全参加者で共有しました。そして、日本側1人目のスピーカーとして法学研究科博士後期課程3年の荒澤喜寛氏が登壇し、「Criminal Penalties under Individual Labor Relations Law : A Comparative Study of Japanese and French Labor Criminal Law」という題目にて報告及び質疑を行いました。続いて、韓国側1人目のスピーカーとしてソウル大学校のキム・イエジン氏が登壇し、

「Artificial Intelligence, Digitalization, and the Future of Labor Law: The Case of Korea」という題目にて報告及び質疑を行いました。次に、日本側2人目のスピーカーとして法学研究科博士後期課程2年の柏木彩奈氏が登壇し、「Employment Security for people with Disabilities: Focusing on Employment Consideration」という題目にて報告及び質疑を行いました。続いて、韓国側2人目のスピーカーとしてソウル大学校のチョン・ヒョンウ氏が登壇し、「How to Protect Platform Workers: The Cases of the United States and South Korea」という題目にて報告及び質疑を行いました。次に、日本側3人目のスピーカーとして法学研究科博士後期課程2年の朱 竑宇氏が登壇し、「Reconstructing the Pursuit of Duty to Care for Safety Liability in Taiwan: Focusing on a Comparative Study with Japan」という題目にて報告及び質疑を行いました。続いて、韓国側3人目のスピーカーとしてソウル大学校のシン・ユジュン氏が登壇し、「Digitalization

and the Expansion of Labor Law」という題目にて報告及び質疑を行いました。次に、日本側4人目のスピーカーとして法学研究科修士課程1年の服部 斗満氏が登壇し、「Non-Payment or Reduction of Retirement Benefits」という題目にて報告及び質疑を行いました。最後に、共同開催者であるソウル大学校を代表してソウル大学校の崔副教授から、当日の大学院生からの個別報告を本分科会の趣旨との関係から総括し、継続的な交流を約束しつつ、閉会の挨拶を行い本分科会は終了しました。

その後、北海道大学主催の全体会及びレセプションパーティに報告者全員で参加し、他分科会における開催内容や交流の好事例を把握するとともに、今後の両校間での交流の発展に関して参加者間で意見交換し、次年以降も両校間で継続的な交流を継続することを確認しました。

(法学研究科)

分科会2

Strategies for Forest Protection and Wildlife Management in the Era of Climate Change

気候変動時代の森林保護と野生生物の生息地管理戦略／農学研究院 教授 宮本敏澄

農学部森林科学科とソウル大学校農業生命科学研究科は「気候変動時代の森林保護と野生生物の生息地管理戦略」をテーマに、サテライト分科会を開催しました。本セッションは、地球温暖化による森林生態系の変容と生物多様性の危機を背景に、森林保護・野生動物の生息地管理・流域生態系の保全を統合した学術交流と政策方向性の提示を目的として企画されました。

当日は両校から計70名以上が参加しました（北海道大学 研究者10名、大学院生21名、学部学生他15名／ソウル大学校 研究者2名、大学院生6名）。招待講演・若手研究発表・Q&A・フィールド討議を含む全10件の発表が行われ、

病虫害・土壌温暖化、生態遺伝、哺乳類・昆虫・ダニ媒介宿主、緑化回復後の生息地利用などの多角的成果が共有されました。会場では気候変動に対する森林機能低下（炭素固定・水循環調整・地域生計基盤）の懸念、分野横断型アプローチの必要性、科学・政策・コミュニティ参画連携の重要性が強調されました。

2日目午前には北方生物圏フィールド科学センター 苫小牧研究林へ移動し、森林博物館・鳥類標本・哺乳類剥製・樹冠観測塔（キャノピータワー）見学と討論を実施しました。現地講義では、研究林における保全施策と生態観察（林冠構造、野生動物の生息状況、環境ストレス応答の可視化）が行

われ、大学院生・若手発表者らが実証フィールドからの知見創出と協働教育の可能性について議論しました。

今後の両校交流は本年6～8月に合同森林実習として、天塩・中川研究林及び南部学術林での共同開催を計画し、また日本学術振興会の二国間交流事業への共同研究申請を予定しています。研究共著・地域ネットワーク形成・フィールド教育連携を通じて、東アジアにおける寒冷域森林と野生生物保全の知の共樹冠観測塔創基盤を強化していく所存です。

（農学研究院）

HU-SNU JOINT SYMPOSIUM 2025

SATELLITE SESSION ON FOREST ECOLOGY & WILDLIFE SCIENCE



NOVEMBER 5-6, 2025
HOKKAIDO UNIVERSITY,
SAPPORO, JAPAN

Exploring forests, wildlife,
and collaboration between
Japan and Korea



Research Faculty of Agriculture
Hokkaido University

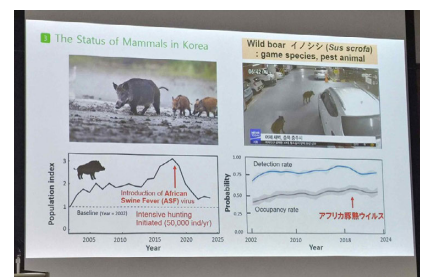


CALS Seoul
National University

分科会プログラム



樹冠観測塔



ソウル大学校による研究発表

分科会3

Innovations of Nuclear Energy and Radiation Technology for a Sustainable Society

持続的な社会に向けた原子力と放射線技術のイノベーション／工学研究院 准教授 河口宗道

研究分科会「持続的な社会に向けた原子力と放射線技術のイノベーション」を開催しました。本分科会は、地球温暖化対策やエネルギー安全保障の確保といった現代社会が直面する重要課題に対し、原子力及び放射線技術に係る革新技術から幅広い応用の可能性を議論することを目的としたものです。特に、脱炭素社会の実現に向けた安全な原子力利用、医療・産業分野における放射線応用の高度化、さらには新たな材料・シミュレーション技術など、持続可能な社会につながる研究を総合的に俯瞰する機会として位置づけられました。また、両大学の将来的な研究協力を見据えて、若手研究者の交流促進を図ることも重要な狙いとしています。

工学研究院応用量子科学部門からは千葉 豪教授をはじめ、教授4名、准教授2名、助教2名、大学院生2名が参加し

ました。ソウル大学校からはキム・ウンス教授を中心に、教授2名、ポスドク2名、大学院生9名が参加し、2日間で両大学から合計21件の最新の研究成果が発表されました。発表テーマは「原子力・放射線教育」「原子力システム安全」「放射線利用」「材料科学」「高度シミュレーション技術」など多岐にわたり、各大学の強みが明確に示されました。発表後には活発な質疑が行われ、研究手法の比較や共同研究の可能性について具体的な議論が交わされました。

特に印象的であったのは、両大学の若手研究者及び大学院生による率直かつ意欲的な議論です。20～30代の参加者が中心となり、自身の研究内容だけでなく、相手大学の研究内容に関する建設的な意見を積極的に提案しました。その結果、分科会全体の雰囲気は活気が生まれ、若手同士が学術的刺激

を受ける場になりました。両大学が「原子力と放射線技術のイノベーションが持続可能な社会の実現に貢献する」という共通認識を持っていることも再確認され、今後の若手研究者の連携深化に向けた基盤が新しく形成されました。将来的な共同研究へと発展し、大きな成果につながることが期待されます。

本分科会の議論を通して、研究課題の共通点や互いの強みを整理できたことは、今後の国際共同研究に向けた具体的な方向性を検討する契機となりました。これらの成果を踏まえ、両大学間の研究協力が一層強化され、原子力と放射線技術のイノベーションに向けた新たな取り組みへとつながることが期待されます。

(工学研究院)

分科会4

One Health Approaches to Control Infectious Diseases

One Healthアプローチ：感染症制圧へ向けて／獣医学研究院 教授 迫田義博

獣医学部において「One Healthアプローチ：感染症制圧へ向けて」をテーマとする獣医学分科会を開催しました。本分科会は、本年より人の健康・動物の健康・環境の健康はすべてつながっているというOne Healthの概念を推進するために企画されました。本年は、鳥インフルエンザなど「感染症制御」に関する国際的な課題に対し、学際的な視点から議論を深めることを目的としました。

初日は開会式に続き、6件の研究発表が行われました。ソウル大学側からは、カンソク・チョイ教授による「韓国における高病原性鳥インフルエンザ対策」、ダエサブ・ソン教授による「犬インフルエンザウイルスの過去・現在・未来」、ジョンウ・リム博士による「感染症に対するナノ工学的ワクチン・診断システム」が報告さ

れました。日本側からは、池中良徳教授が「One Health リサーチセンターの取り組み」、日尾野隆大准教授が「HOT-WIRE：野生動物事案対応チームの活動」、直 亨則特任講師が「学術機関における先端診断と教育の連携」を紹介しました。いずれもヒト・動物・環境の健康を統合的に捉えるOne Healthの理念に基づき、最新の研究成果と実践事例を共有する内容でした。最後にこれまでの両大学の友好関係をよく知るハンサン・ユ教授から今回の成果と今後の展望について提言が示されました。質疑応答では、鳥インフルエンザの国際的監視体制や、診断技術の標準化、野生動物における感染症リスク評価など、今後の協力の方向性について活発な議論が交わされました。午後には人獣共通感染症国際共同研究所の視察と全体会議への参加を行い、

交流をさらに深めました。

2日目は、次年度以降の活動計画を協議しました。具体的には、動物に関わる法律問題を獣医学の知識を使って解決する学問分野である「法獣医学」をテーマとして、One Healthの実践を進めることとしました。この中では、若手研究者の交流促進、共同研究テーマの設定、国際機関との連携強化を柱としました。

本分科会は、感染症制御に関する知見を共有し、学際的ネットワークを強化する貴重な機会となりました。今後も、One Health教育と研究の国際的推進に寄与するため、ヒト・動物・環境の健全性を守るための国際協力を一層推進してまいります。

(獣医学研究院)



これまでの交流の経緯や今後の活動を提案されるソウル大学 教授



シンポジウム開催後の参加者による集合写真

分科会5

Care and Empathy: Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Region

ケアと共感——スラブ・ユーラシア地域における学知と社会発信／スラブ・ユーラシア研究センター 准教授 安達大輔

スラブ・ユーラシア研究センター（以下「SRC」という。）は、11月3日（月・祝）にジョイントシンポジウムの分科会をSRC大会議室において開催しました。この分科会はソウル大学校ロシア・東欧・ユーラシア研究所（以下「IREEES」という。）との共催により実施されました。日韓両国におけるスラブ研究の中核を担う両研究所はこれまでも継続的に交流を重ねてきており、ジョイントシンポジウムの枠内で分科会を開催するのは今回で11回目となります。

現在SRCでは、これまで蓄積してきたスラブ・ユーラシア地域研究の知見を基盤として、急激に変動する世界秩序の中での生存戦略を探究する研究プロジェクト「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」を進めています。一方IREEESでは、韓国における看護人材不足という社会的課題を背景に、「ケアの哲学」に関する人文知を理論的基盤とした基礎研究「ロシア語話者移民の看護師・医療従事者の養成

についての研究」を立ち上げました。本分科会では、当該分野で日韓を代表する研究機関によるこうした最新の研究プロジェクトの成果を生かし、ますます多極化し多様性を増す現代世界において、「ケア」や「共感」が果たすことのできる役割を多角的に検討しました。社会の分断、対立、不平等といった現代的課題に対して、社会・産業界との協働を通じた研究・教育の可能性を探りました。当日の報告では、ロシア・モンゴル・韓国におけるケアや共感の様々な実践が、戦争や革命、介護・看護、地域コミュニティ、記憶、ジェンダーなどの現代的な視点から取り上げられ、極めて充実した議論が行われました。合計23名の参加者の中で大学院生や日本学術振興会特別研究員ら若手研究者の報告も高い評価を受け、次世代へ研究のバトンをつなぐという意味でも意義深いものとなりました。このように分科会を通じて、「ケアと共感」というテーマの重要性と今日的意義、並びに日韓共同研究の有効

性が確認されました。今後は、両研究所の現在のプロジェクトを発展させる形で、オンラインを中心としたセミナーや研究打ち合わせを継続的に実施する予定です。またSRCでは、センターを拠点とする国際サマースクールの開催を計画しており、IREEESも潜在的な参加機関として想定しています。大学院生やポストドクレベルでの積極的な交流を通じて、将来的な国際共同研究の基盤形成を進めていく予定です。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



分科会参加者の集合写真

Bridging Research, Education, and Implementation: Medical AI for Clinical Innovation and Societal Impact

MRIセッションでは、筋骨格系イメージング、神経疾患に関する新たなMRI指標、筋萎縮性側索硬化症（ALS）モ

今回の医学系研究分科会を通じ、北海道大学とソウル大学校の国際連携はさらに強化されました。今後は、共有された研究成果を基盤に共同研究の発展を図るとともに、教育・研究双方で持続的な交流を進めてまいります。

(医学研究院)



分科会7

HU-SNU Joint Symposium on “Toward Next-Generation Thermal-Fluid and Energy Engineering”

次世代の熱流体・エネルギー工学に向けて／工学研究院 准教授 植村 豪

10月27日（月）・28日（火）に、「次世代の熱流体・エネルギー工学に向けて」と題し、機械・宇宙航空工学に関する分科会を開催しました。本分科会は、ソウル大学校側の代表としてド・ヒョンロク教授、北海道大学側代表として工学研究院の植村 豪准教授が中心となり、企画・運営されました。

本分科会では、教員による口頭発表として、ソウル大学校7件、北海道大学5件、さらに学生による発表として、ソウル大学校2件、北海道大学5件が行われました。開催形態は対面方式のみでしたが、両大学から約30名が参加し、大変盛況な分科会となりました。

発表内容は、流体及び二相流現象、燃焼・推進、エネルギー変換・貯蔵技術、計測・可視化手法など、基礎研究から応用研究に至るまで幅広い分野にわたりました。2日間を通じて活発な議論と情報交換が行われ、参加者にとって今後の研究活動の連携や発展につながる有意義な機会となりました。また、1日目夜にはウェルカムパーティーを開催し、研究交流のみならず参加者相互の親睦を深めることができました。

さらに、分科会期間中には研究室見学に加え、北海道ガス株式会社及び株式会社北海道熱供給公社の発電・熱供給施設の見学ツアーを実施しました。

北海道大学並びに北海道における熱・エネルギー研究の成果と実社会での取り組みを、研究から現場まで幅広く理解いただく機会となりました。

（工学研究院）



分科会参加者の集合写真

分科会8

2025 International Workshop on the New Frontiers in Convergence Science and Technology

2025先端複合科学技術に関する国際ワークショップ／情報科学研究院 教授 吉岡真治、准教授 菅原広剛

情報科学研究院とソウル大学校融合科学技術大学院（Graduate School of Convergence Science and Technology：GSCST）による当分科会は、11月6日（木）、情報科学研究院において、浅井哲也副研究院長とGSCSTのハワード・リー大学院長の両代表による挨拶に始まり、昼食会を挟んで午前午後で開催されました。両大学院各3名の教員による講演が行われ、学生9名（情報科学院5名、GSCST4名）がポスターによる研究紹介に臨みました。

講演テーマは、情報科学研究院から、柔軟に曲がる材料を用いたセンサの開発、原子間力顕微鏡を用いた細胞の機械的粘弾性観察、AIによる論文からの化学実験手順抽出法開発、GSCSTから、界面制御によるリチウム蓄電池の高性能化、放射線を用いた物体透視画像構成のアルゴリズム開発、多角的生体モニタリングデータを利用したAI

による薬効継続性評価法研究と、両大学院とも多岐にわたりましたが、それぞれ特徴ある内容に多くの質問が寄せられ、講演ごとに活発な議論がなされました。

分科会後には教員同士、大学院生同士の懇親会が開かれました。参加者からは思いのほか深い議論ができ満足との感想があり、当分科会は懇親会も含め盛会のうちに無事終了しました。

情報科学研究院における当分科会の実施主体は、今回からビッグデータとIoTに関する協同センター（吉岡センター長）が担当し、これまでの分科会世話人や前年の講演者の参画も得て運営に当たりました。当分科会は以降も継続していくことが両大学院関係者間で確認されました。

（情報科学研究院）



分科会開会挨拶



分科会参加者の集合写真



分科会ポスター発表

分科会9

Environmental Chemicals and Human Health

環境化学物質と人びとの健康／環境健康科学研究教育センター 特任准教授 アイツバマイゆふ

環境健康科学研究教育センターは保健科学研究院と共同で、11月13日(木)・14日(金)の2日間、分科会「北海道大学・ソウル大学校・マヒドン大学ジョイントクラス2025：環境化学物質と人びとの健康」を開催しました。

本クラスは北海道大学とソウル大学校のジョイントシンポジウムを基盤とし、平成28年に共同授業としてスタートし、今年で10周年を迎えました。平成30年からマヒドン大学が加わり、3大学による国際的な教育・研究ネットワークがさらに強化されています。COVID-19パンデミックという困難の中で、オンラインの活用などにより交流を継続してきたことも、本プログラムの大きな特徴です。今年は北海道大学から18名、ソウル大学校から10名、マヒドン大学から6名の合計34名の大学院生が参加しました。参加者の国籍は、日本、韓国、タイを中心に、ミャンマ

ー、コロンビア、ザンビア、ウガンダ、ロシア、中国等からの学生も含まれ、国際色豊かな交流の場となりました。大気汚染、室内環境、プラスチック問題、環境と子どもの健康、バイオモニタリングなど環境科学分野の多くの領域に焦点を当て、各大学から8名の教員による専門的な講義が行われました。講義に加えて、大学院生同士のグループディスカッションやワークショップも行われ、異なる文化や研究背景を持つ学生が積極的に意見交換を行いました。

参加者からは、「異なる国や文化の研

究者と直接議論できる貴重な機会だった」「将来の共同研究の可能性を強く感じた」といった声が寄せられ、プログラムの意義が改めて確認されました。来年の「HU-SNU-MU ジョイントクラス2026」はタイ王国で開催予定です。

今後も当センターは、国際的な学術交流を通じて、持続可能な社会の実現に貢献する人材育成を推進してまいります。

(環境健康科学研究教育センター)



分科会参加者の集合写真



グループワークプレゼンテーションの様子

分科会10

Social contribution through an interdisciplinary and pragmatic university model: Innovation, convergence, challenge, and proposals for a new university role

学際的・実用主義的な大学モデルを通じた社会貢献：革新・融合・挑戦、新たな大学の役割に関する提案
／高等教育推進機構 教授 亀野 淳、講師 鄭 漢模、助教 田中孝平

高等教育推進機構高等教育研究部、総合教育部、新渡戸カレッジ教育推進部（代表：亀野 淳高等教育研究部長・教授）、ソウル大学校SNU College（学部大学、代表：ソン・ジヨン 副学長・教授）は、11月6日(木)に分科会を開催しました（参加人数：本学11名、ソウル大7名）。

今回の分科会のテーマは、「学際的・実用主義的な大学モデルを通じた社会貢献：革新・融合・挑戦、新たな大学の役割に関する提案」です。

本テーマは、両大学が共通して「レイト・スペシャライゼーション」（学生が入学後に専門を選択できる制度）を積極的に導入している点に着目して設定されたものです。北大では、平成23年度から「総合入試」を導入し、

「レイト・スペシャライゼーション」の理念を実践しています。ソウル大学校においても、平成21年度からの自由専攻学部を設置したのち、令和7年には、レイト・スペシャライゼーションを前提とし、新しい学部として「SNU College」を設けるなど、両大学は特徴的な取り組みを実施しています。

当日は、こうした「レイト・スペシャライゼーション」に関する制度、



集合写真

学習支援、特色のある教育プログラムの3つの側面から、各大学から3件ずつ、計6件の発表が行われました。さらに、来年度のソウル大学校での分科会の開催、共同研究の推進、若手研究者の交流、共同教育プログラムの開発など、今後の協力に向けた具体的な意見交換がありました。

(高等教育推進機構)



開催の様子

職員交流

令和7年度北海道大学事務職員海外短期集中研修

令和7年度北海道大学事務職員海外短期集中研修が11月17日（月）～21日（金）に行われました。本研修は本学の戦略的国際連携先である韓国ソウル大学校（SNU）との第28回ジョイントシンポジウムの一環として、両大学の職員がそれぞれ相手大学を訪問し実際の現場を見学しながら、各部署の業務や優れた取り組み、課題等を共有し、意見交換を行うものです。今年度は、SNU企画調整室から広報チームのカン・ジス職員、コミュニケーションチームのクォン・ジェヒョン職員の2名、本学からは社会共創部広報課広報・渉外担当の多門理恵主任が参加しました。

11月17日（月）・18日（火）は本学参加者がSNU冠岳キャンパスを訪れ、中央図書館、朝鮮王朝期の王立図書館に系譜を持つ奎章閣を見学した他、企画調整室ではSNUでの報道対応の方法や公式コンテンツの運用等について意見交換を行い、大きな学びを得ることができま

した。また、広報・コミュニケーション関係を担当するキム・ユキョン副学長と懇談し、SNUと本学での広報・コミュニケーションにおける共通の課題やその対応策について知見を広げることができました。続く19日（水）には両大学の参加者が本学へ移動し、20日（木）・21日（金）は、インフォメーションセンター「エルムの森」、総合博物館、オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」を見学した他、広報・社会連携本部広報・コミュニケーション部門、社会共創部広報課を訪問しました。

広報・社会連携本部広報・コミュニケーション部門では、南波直樹部門長からの本学における全学的な広報・コミュニケーション活動の企画立案・実施についての説明に加え、同部門の職員も交えながら、国外へ向けた情報発信等について意見交換を行いました。社会共創部広報課ではプレスリリースの配信手順や記者会見の実施方法等に

ついて情報共有しました。また、事務統括担当である行松泰弘理事と懇談し、和やかな雰囲気の中、各研修生が今回の研修で得られた学びについて報告しました。

SNU参加者からは、教員、外国人職員、日本人職員が協働して広報・コミュニケーション業務を行っている点が印象的であり、今後のソウル大学校での広報活動に関して貴重な示唆を受けたとの感想が寄せられました。本研修は、両大学の参加者が事前に相手先の要望を聞き取った上で研修計画を立て、基本的に英語を用いながら5日間行動を共にします。このため、語学力向上を図ることはもちろん、業務に関連する多くの学びや気づきを得られる貴重な機会となりました。今後も活発な交流事業の展開が期待されます。

（国際連携推進本部、国際部国際企画課）



ソウル大学校でのキム副学長との懇談



北海道大学での行松理事との懇談後の記念写真



両大学職員の記念写真